

東北地方太平洋沖地震の犠牲になられた方のご冥福を心よりお祈ります。また被災された方とそのご家族の方の心からお見舞い申し上げます。

大変な大惨事になってしまいました。連日報道される日本のマスコミを通じて、また現地のマスコミを通じて、そして日本から戻ってこられた方のお話を聞いて、まさに想像を絶する大惨事になっていることが良く分かりました。遠く離れたここから何も手伝うことのできない無力さに自分への憤りを感じ、またご近所からのお見舞いにベルギーの方の優しさを感じ、何が自分にできるかを考える日が続いていました。そして今回、子供達の元気な姿をこの会報で紹介することが少しでも皆さんに微笑が戻るように、明るい話題を書きました。

この原稿を書いている今、私たちの幼稚園では小学校低学年と一緒に春の特別保育を行なっています。20人ほどの規模で、4つのチームに分け、一番年長の小学生が年中児まで含めたそのチームのリーダーになり、1週間に渡ってゲームやクイズ、そして創作を通して得点を競い合います。最終日に最高得点となったチームが優勝し、表彰状を貰うことになっています。初めてリーダーとなる小学生は、どのようにチームをまとめていくのか良く分からず、時にはチームがバラバラになることもあります。また子供の資質によって得点が大きく左右されることもあります。私は毎回、リーダー達に「チームの仲間を信じて、どんどん指示を出してみよう。するとみんな一人ひとりが役割を理解し、そして高得点を得ようとする」と話しています。実際、実力の差はありますが、役割をしっかりと伝え、それを実行させているチームが高得点を得ています。まず仲間を信頼すること、そして困っている仲間を助けること。これがこの活動で一番理解して欲しいことです。「一人はみんなのため、みんなは一人のため」という言葉をそっくり彼らに贈っています。次に大事なことは年齢よりも少し背伸びした課題を与えることで好奇心がより大きくなります。小学2年生と言っても直前までは1年生でした。彼らに毎回「顕微鏡を使った観察」をさせています。実際に顕微鏡を扱うことは彼らには難しいので、彼らのリクエストに応じた野菜などの細胞の焦点を合わせてかの観察してもらいます。300倍で見た玉葱や人参の細胞。私の髪の毛と彼らの髪の毛の違い。そしてティッシュの繊維。顕微鏡を覗く彼らから驚きの声が上がります。「先生、ティッシュって糸が重なってるんですね」「玉葱に水が通る穴があるんだ」など、日常とは違う光景に彼らの好奇心は否応なしに盛り上がりて行きます。「実体験」がとても大切だと思っています。「虫眼鏡で太陽を見るとどうなるのかな?」「先生、目が痛くなります」。こんな会話から目のイラストを描いて庭に持ち出し、実際に太陽の焦点を合わせると、その黒目の部分からすぐに煙が立ち始めるのを、子供達は驚異の眼差しで見つめていました。太陽を虫眼鏡で見ると目が焼けてしまうことを初めて見たのです。そしてその太陽熱を使って火を起こすことも、お湯を作ることもできると話をして上げます。公園の木の高さを測ったこともあります。鉛筆と巻尺と友達の協力で簡単に測る方法を説明し、実際に測定してもらいました。そして教室に戻り、直角三角形の定規を使って、なぜその様な方法で測ることができるのかの説明をしました。恐らくまだまだ理解する力はないと思いますが、それでも「実際に測ってみた」という体験は残ると思います。そして将来、その様な単元が教科書に出てきたとき、思い出してくれればと思っています。

活動の間、勝敗に拘り、年下の仲間に強く当たる子供もいます。しかし、同じチームの仲間がそれをとりなし、そして年下の仲間に手を差し伸べるようになることもあります。自然にできる子どもが弱者を引っ張って行くようになります。これは昭和の日本の風景にあった「ガキ大将」がまとめる子供世界がお手本です。ご存知のように「ガキ大将」は強ければ誰でもなれるものではありません。弱い仲間を庇い、リーダーシップを持って仲間を纏め上げ、そして仲間がみんな楽しく遊べるように引っ張っていく子供こそが「ガキ大将」なのです。大阪で育った私は生活していた団地の中で「ガキ大将」に引っ張られて遊んでいました。そこには幼稚園児なども参加していたのですが、鬼ごっこや三角ベース(ゴムマリを使って素手で行なう野球もどきの遊び)など、体力によって勝敗が分かれる遊びをするとき、我が「ガキ大将」は年少者を「ゴマメ(未だになぜこのような名前を使ったのか分かりません)」と名付け、「鬼ごっこに参加できるが鬼にはならない」「三角ベースに参加できるが守ったり、アウトにならない」という特別ルールで年少者も楽しく遊べるように配慮してくれました。その様な優しさがある反面、喧嘩も強く、体力がある子供が「ガキ大将」でした。学校の成績が良いだけでは「ガキ大将」にはなれません(逆に「ガキ大将」余り成績が良くなかったように覚えています)。

情報だけが多くなり、卓上で何でも耳に入る世界となりました。勉強も成績を上げるための勉強法が多くなり、頭でっかちと言われる人間が増えているようです。しかし、子供達は違います。大人が彼らに環境を作ってあげるだけで、実際に体験し、それが知恵や好奇心に繋がる可能性を大いに持っています。日本では昔から「今の若い者は」という言葉が使われていま

す。しかし「今の若い者」を育てた私たちに責任はないのでしょうか。そして「今の若い者」にそでることがたくさんあるのではと思います。私は日本の若者を信じています。彼らが再び美しい日本を、そして希望溢れる未来を作っていくことを。

《続く》